



「ラ抜き言葉」は100歳以上？！

法政大学 尾谷 昌則 教授

日本語の乱れを憂える人は多いが、実際にそのような方々が日本語の実態をよくご存じかというのと、そうでもない事が多い。例えば、ラ抜き言葉である。これは一段活用とカ行変格活用の動詞が可能の意を表す際の「食べられる」や「来られる」を「食べれる」「来れる」とするものであるが、これが一体いつ頃から始まったのかご存じの方は少ないだろう。管見の限りでは、今から108年前の明治43年（1910年）に書かれた大杉栄の手紙（「獄中消息」より）にその使用例がある。

堀保子宛・明治四十三年十月十四日

八月に書いた手紙は不許になったが、九月に出したのは着いているのだろうか。足下の方からさらに便りがないので、少しも様子が分らない。この手紙の着く頃は、ちょうど足下が面会に来れる時に当たるのだが、今はただそれのみを待っている。

「足下」や、検閲を受けたことを示す「不許」などは、現代ではあまり目にしない言葉であり、時代を感じさせる。大杉栄は、他にも「その男は（中略）五人十人の看守の寄ってたかつての蹴ったり打ったりには、平気で堪えて来れそうな男だった。」（『続獄中記』1919年）や、「毎日ただベッドの上で寝てくらし。よくもこんなに寝れるものだと思つたくらいによく寝た。」（『日本脱出記』1923年）というラ抜き表現を使用している。

昭和に入ると、「ことしは見れると思つて来た……」（太宰治「服装に就いて」1941年）や、「もう雑役夫は来れないそうだ。」（大江健三郎「死者の奢り」1957年）といった用例も見つかる。平成22年度の「国語に関する世論調査」によれば、「見れる」と「来れる」は、すでに「見られる」や「来られる」とほぼ同じくらいの使用率に達しているという。すべてのラ抜きを肯定するつもりは勿論ないが、すでにいくつかの語においてラ抜きが定着しつつある現状は、冷静に認めるべきであろう。

ところで、上に挙げた用例の中で、最初の2つがカ変動詞の「来る」であるのは偶然だろうか。明治期に言文一致運動が起こるまでは、文語体はほぼ古典語のようなものであった。尾崎紅葉の「金色夜叉」（1897－1902年に新聞紙上で連載）も、「今は二人の往来も漸く疎くなりけるに及びて、俄にその母の来れるは、如何なる故にか……」や、「抜き足忍び来れる妻は、後より小声に呼びて……」といった文語体で使用されている。ここに出てくる「来れる」はラ抜き言葉ではなく「来ている」の意であり、現代では「眠れる森の美女」や「生きとし生けるもの」という表現にその名残がある。「金色夜叉」の中には、このような「来れる」が36例もあり、使用頻度の高い語であったことが伺える。意味も読みもまったく異なるとはいえ、既に「来れる」という表現が存在していたからこそ、「来られる」が「来れる」につられて変化したのではないか。そう考えれば、ラ抜き表現の中で「来れる」がいち早く生まれた理由も説明できる。

ラ抜き言葉は確かに誤用なのかもしれないが、もう一步踏み込んでその歴史について考えてみると、今まで気づかなかったロマンが見えてくる。日本語検定の勉強をする際には、とにかく正用を暗記するだけになりがちかもしれないが、ぜひ誤用も含めた日本語の面白さについて考えて頂きたい。